

## 第2部：吉田倫子 vs 島津芳枝

吉田：そんなことはうちでもやっている、それなら参加しなくちゃだわ、と言って参加したことになる横浜市中央図書館の吉田倫子です。隣にいるのが。

島津：大分県宇佐市民図書館の島津芳枝です。初めまして。よろしくお願ひいたします。登壇者ということで、大物に挟まれてドキドキしているのですが、実は海援隊関連では事例発表などをするのが3回目です。お手元にあります、この「困ったときには図書館へ～図書館海援隊の挑戦～」の中に去年の事例発表が167ページから載っております。もしお時間があればお読みになってください。さらにその前の、初めて図書館海援隊のフォーラムを横浜の図書館総合展で開催した時、サッカー部で事例発表したことがございます。何と出演依頼は1週間前でございまして、1週間でプレゼンデータを作ったという思い出があります。それ以来、なにかとお声が掛かりまして、今日という形になります。

吉田：海援隊が誇る好感男子2人の話の後に、女傑と言われてしまいました。

島津：そうですね。私自分では普通だと思っているのですけれども。危険物だそうなので「もう呼ばない」と言われるようなことも発表していきたいかな、思っております。よろしくお願ひします。

吉田：というわけで海援隊の危険物2人による「こんなことをやってきた。あんなことをやってみたい」を始めたいと思います。よろしくお願ひいたします。

島津：お願ひいたします。

吉田：私と島津さんが出会ったのは実は海援隊が初めてじゃないんですよ。

島津：そうですね。実はその前に今愛知県の田原市立図書館長の豊田（高広）さんという方がいらっしやいまして、ご存じでしょうか？ご存じの方ちょっと手を挙げていただけますでしょうか。3分の1ぐらいはご存じですね。ありがとうございます。実はmixiでナンパされまして。図書館のことを書いていましたら「面白そうなことやってるね。お友達になりませんか」ってメッセージが来まして。

まあ、「既婚者のお友達条件は愛妻家」という前提があったのですがね。それでちょっといろいろと書いて交流をしていたのです。そしたら2007年「滋賀県の図書館を見にいくから一緒に行かない？」っていうメッセージが。

吉田：ナンパされたんですね。

島津：会ってもないのに実に初対面でお泊り旅行に誘われてしまいました。「何で私九州か

ら滋賀県に図書館巡りに行くんだろ？誘われるんだろ？」と思いながら誘いに乗ってしまった私も私ですが。行った先に、今は白河市立の新（出）さんと、吉田さんがいらっしやっ。それが初対面でございました。

吉田：その時が初対面で、その後また別の場所で会ったんですよね。

島津：そうですね。公共図書館員のタマシイ塾っていうのを豊田さんと吉田さんで始められてまして、それに第一期生として参加したという形になっております。

吉田：ここでタマシイ塾って何じゃろ、って思う方もいらっしやると思うので、ちょっと説明をします。別にスピリチュアルな悪の秘密結社っていうわけではなくて、図書館員の新たな研修の形を目指してつくられた画期的な学習組織です。今日は会場に塾長の嶋田さんもいらっしやっていますが、第一期の開始が2009年10月。海援隊の結成が翌年の2010年1月なので、この二つは全く別のところでほぼ同時期に始まったんです。そして、時期が同じであるだけでなく、志や目的も似ています。まず志ですけれども、なぜか両方とも幕末維新を意識しています。私が書いたタマシイ塾への参加を呼び掛けた檄文ではこんなことをうたいました。「どんなに心がなえるような出来事に出会っても、図書館は何のためにあるのか、自分はそこで何をなしたいのかという魂の部分が強くあれば、われわれは何度でも立ち上がれます。どんなにがんばっても、1人では心が折れてしまうこともあります。そこで、全国の元気な図書館司書が集まり、刺激し合う関係を持続できるような仲間づくりができる、参加者のつながりを重視する塾形式にしました。目指すは図書館界の松下村塾！志は高く、飲み会は楽しく♪」とまあ、そういう会だったんですよね。

島津：そうですね。

吉田：海援隊については言わずもがなでわかりますよね？つまり、双方幕末維新を意識していた。孤立していろんなところで心が折れそうな図書館員が結集することを願って始めたということで、既に海援隊に出会う前からわれわれは海援隊的なものに出会っていたと。

島津：そうなんですね。

吉田：そういうことなんです。結局それが2010年に始まったわけですけどけれども、実は同時期にもう一つ岡本真さんたちが立ち上げたU40（アンダーフォーティ）というものもありまして、この宣言が出たのも2010年9月だったんです。これも組織を超えて横のつながりを持つとする集まりだった。

つまり2010年というのは「そのとき図書館界が動いた」という年であり、その翌年に震災が起こってそこにsaveMLAK（セーブムラック）という人のつながりの組織が立ち上がり、そこにみんなが集結したという歴史があった…ということは、ちょっと押さえておきたいところかな。あとから思えばそういうことだったんだな、と。

ちょっと前段が長かったんですけれども、これも海援隊の大切な背景としてお話をしました。というわけで、その海援隊の話に入っていきたいと思います。海援隊にはどうして参加したのかを、島津さんからしてもらってもいいかな。

島津：そうですね。私、海援隊は本当に単純に豊田さんから「海援隊というのができましたよ。参加しませんか？」っていうメールが来たからなのです。レベルは全く違いますが「話して、理解していただけた」というのが初めてで、当時の私は豊田さんに依存していたところがありました。豊田さんという窓を通して図書館を見ていました。豊田さんの紹介でビジネス支援図書館推進協議会にも参加しました。なんせ、九州から出たことがないので、東京駅に行くのが怖くて。ビジネスライブラリアン講習に参加するとき、「絶対に道に迷うに違いない」と思って、静岡経由にして静岡市立図書館を見学しつつ、ビジネスライブラリアン講習で講師を務める豊田さんと東京まで同道したくらいです。海援隊も「豊田さんがお勧めになるんだから、楽しいことができるかもしれない。役に立つことができるかもしれない」と参加したところが大きかったです。

吉田：それまでは大分県で、自分は本も好きだしこじんまりやっついこうと思っていたのが、豊田さんに出会って目覚めちゃったと。

島津：そうですね。結果的に言うとそうなります。ビジネス支援の考え方もそうですが、タマシイ塾では非正規の方がたくさん参加していて、「どういうふうに困っているか」という話もたくさん聞きました。それでおこがましいんですが「自分がこういうふうに出られるということ自体もいかに恵まれているか」ということにそのとき気が付きました。「じゃあできることは最大限やっついこう」と思ったので、今ここに登壇しているような気がしています。

吉田：海援隊に入ってどんなことをやったのかという話もちょっと聞いていいですか。

島津：最初に始めたのは図書館海援隊のサッカー部です。一昨日も日本サッカー協会でサッカー部のフォーラムがありました。実は「図書館で温泉ダービー」という企画で交換展示を群馬県草津町立の中沢（孝志）さんと愛媛県立の天野（奈緒也）さんがされていて、ビジネス支援のメーリングリストでその報告を目にしました。キャッチコピーが「温泉日本一同士のサッカークラブの対決」というあおりでしたので、「大分を除いてそんなことはやってはいけません！」と。私サッカー特に好きではなかったんですが本当にそれで「ちょっと参加しますんで」って手を挙げて他の大分の県立図書館とかも巻き込んでいった形になります。その3年間の報告を横浜のフォーラムでやりました。今島津芳枝というふうになっていますが、宇佐市民図書館石井芳枝で検索するとそのときのプレゼンデータが出てきます。

吉田：そう言えば、外に出るようになって今の伴侶とも出会ったとか。

島津：そうですね。

吉田：外につながると伴侶もつかまえられると。

島津：医療つながりでもあったので静岡県立こども病院の塚田（薫代）さんからは「ほら、医療健康情報サービスをするといいいことがあるのよ」って言われました。

吉田：なるほど。

島津：出会いは確かにビジネス支援の中級講座でした。海援隊サッカー部のプレゼンデータを作ってくださったのも実は彼で。企業広報で社長のプレゼンを作る、パワーポイントの作家のようなことをしていたので。1週間でできたのは彼のおかげでございます。

吉田：海援隊ってサッカーと温泉ばかりじゃん、って揶揄する声もあって、実は私もちょっとだけそう思っていた。ただ今回、神代さんの本を読んで、海援隊の役割の一つには複数の図書館がつながって、その図書館集団と外部が連携するときの窓口には海援隊はなると書いてあって、この枠組みの第一弾だったのだなと。なおかつサッカーとか温泉っていうのは地域の特色を生かした地域活性化活動である。そういう意味がこの海援隊の活動にはあったということを改めて気付かされまして。実は今、図書館に横浜F・マリノスからのオファーが来ていて、その背景にも海援隊の活動があったのかな、そうやって種をまくことが全国の図書館に波及していくんだな、って感じて。そこにまた海援隊の意義…図書館集団の渉外窓口であり、PRや連携の役に立つということを発見しました。

島津：私は、地方にいるので、そういう雑音からは無縁でして。それが地方の良いところかもしれませんね。交換展示の関係で良いことは市長部局へのPRになるということがあります。観光振興という意味がありますし、ほぼお金がかからないし、自前の資料も生かせる。そういう意味では、どんな図書館でも参加しやすいと思います。海援隊サッカー部でしか連携しちゃいけないとか交換展示しちゃいけないとかいうこともなく、いろんな図書館に間口を広げているというところがサッカー部の功績なのかなというふうに思います。

吉田：私がやったことも話してもいいかな。

島津：もちろんです。

吉田：海援隊に参加した当時、私は法情報サービスを横浜市の図書館で展開していたので、そこで海援隊を意識した講座を開きました。「暮らしを守る法律講座」という3回の連続講座で、神奈川県行政書士会、消費生活総合センター、それから法テラスと司法書士会との連携で。第1回が行政書士会の「教えて！老後設計」という、今でいう終活講座。

神代さんが本の中でも書いていましたけど、最初に連携先に行って「図書館です」って言うと、何でこの人来たんでしょうっていう顔されるわけです、やっぱり。そのときに、ひるまずに図書館っていうのはこういうこともできるんですよ、と説明することがとても大事だと思った。外に出て行って図書館というのは何ができるかを、きちんと説明しないと伝わらないんだ、ということがよく分かりました。

この講座をやったら行政書士会の人々がノッてきて、中央だけじゃなく地域図書館でもやりませんかと言ってきて、市内のいくつかの図書館で講座もできたとし、さらに去年は鎌倉の図書館でも行政書士会からの持ちかけで講座をやられたそうで、横浜で始めたことが神奈川県下に広がっていった。さっきの海援隊と同じで、種をまくと思わぬところで芽吹くんだなと思いました。

消費生活総合センターの講座は悪質商法撃退講座でした。それから、3回目の法テラスとの連携講座はいわゆるギャンブル依存症がテーマでした。司法書士会で、横浜市にはNPO法人ワンデーポートという、日本で唯一のギャンブルへののめり込みを支援する入所施設があると教えてもらったのがきっかけでした。実は私も周辺にギャンブルの問題があつて悩んでいて、市内にそんな組織があるなら図書館でやる意味もあるだろうと。

そういう意味で私は、医療でもそうだったんですけれど、一人一人の問題に真摯に対応するサービスを始めるときには、いつも自分にひきつけて考えているような気がします。もう一つこの講座で面白かったのは、支援を考えている地元のお寺の人も参加してくれたらして、講座の後に参加者同士の交流の機会を持ったんです。それで、図書館っていうのは人と人をつなぐこともできるのだな、ということにも気付きました。

島津：似た取組というか「困ったときには図書館へ」では37ページに秋田県立図書館が「秋田県の金融広報委員会と連携した取組を今やっていますよ」というふうに出ているんですが、宇佐市民図書館というのは実は2008年から連携をしております。「お金を勉強してみよう会宇佐」という金融学習グループを作ってちょっと講座をしております。

3年間で大体終わりますので次のときはグループ名を「知は力」と変えて行政書士の方や税理士の方から「相続について」とか「交通事故に遭ったときの保険の選び方」とかそういう講座をしていただきました。

全部これ無料です。人件費も交通費も金融広報委員会が持ってくれる。「場所代だけは補助しますよ」と言われますが、図書館だと場所代もかかりません。そういう意味では連携してすごく良かったと思います。

ただし金融学習グループは3年で一応終わりです。今年度は宇佐ではしてはいないのですけれども、本当は全国どこの図書館でもできるのかなど。大分県の場合、金融広報委員会の会長は県知事なんです。日銀の支店長さんが副会長という形で日銀が事務局です。実は日銀前総裁の白川（方明）さんは以前大分の日銀の支店長さんでした。名刺交換をさせていただいた覚えがあつて、総裁になられたときにはちょっとうれしかったですね。

それから2012年、「大分県の金融について」という講座を設定したら、当時の岩崎大分支店長さんが講師になって来てくださることになって。その時うちの教育長から「大分県で2番目のVIPだよ。何で図書館に来ることになったの？」って言われました。私が

別に指名して呼んだわけではなく、講座を設定したら「じゃあ支店長が行くよ」っていうふうになったのです。教育長は着任したばかりだったので、図書館の存在をアピールできたのかなとも思います。

吉田：島津さんのところはいろんなところとつながってPRなさっているじゃないですか。初めは怖くなかった？外部の人間に「図書館の者です」って会いに行くのって。

島津：「困ったときには図書館へ」で事例発表した「麦の学校」関連で「宇佐市役所の者です」ってかなりの企業さんに行ったので、鍛えられました。また、金融広報委員会に関しては、宇佐市の商工労政係から「金融学習グループどっかやってくれるところがないかしら？」って言われたのですね。講師とかもチラシで見ている「無料だったらやっても良いよね」って思ったんです。

吉田：図書館でもやろうと。

島津：そうですね。図書館は期限が切れて終わったんですけど、今は農政課が農業関係の人たちの資金とか家計の付け方とか、そういうので継続してくれているみたいです。「県北地域から金融学習グループなくなっちゃったらどうしよう」って商工労政の担当は思っていた様子でしたが「継続して良かったね」ってこの間も話しました。

吉田：そうすると、図書館にオファーがあるからやるんじゃないくて、どこかやってくれるところないですかって言うのを聞きつけて、そのときに図書館として乗るという、情報網とネットワークの軽さが宇佐にはあるんだ。

島津：そうです。だってチラシが図書館に来るじゃないですか。回覧で回って来たらそれを見て、「これお金かからないな」とか。

吉田：宇佐はつかまえるのが上手なんだね。いや、意外にこの「つかまえる」っていうことをみんなしないと思うんですよ。図書館にいっぱいチラシも来るじゃないですか。それを一つ一つ見て、これは使えるかもしれない…とはなかなか思い付かない。それを、何でこいつこんなにやっているんだろってずっと思ってたんだけど、君は見つけるんだ。

島津：お金がないじゃないですか図書館って。

吉田：ないね。

島津：講師代とかないんで。

吉田：ないよね。

島津：「ただでできる」というふうを探すんです。

吉田：この「ただ」ってキーワードはありだね。

島津：そうですね。

吉田：確か元長崎市立図書館の佐藤美加さんもそんなこと言っていたな。長崎が医療やったときがそうだったって。

島津：今やっている、「保健師さん栄養士さんとの健康情報展示をしよう」というのも、身内だからただで、毎月向こうが展示物を準備してくれて持ってきてくれて展示してくれるよって感じです。

吉田：ちょっと、何だって？栄養士さん？

島津：そうですね。医療健康情報のコーナーを作る前段階として吉田さんから「医療情報やろうよ」みたいな話があって。じゃあ「うちの自治体でやって、役に立つのかな？」と思ったのです。それで保健師さんたちに相談をしてみたら、宇佐市の医療費が同規模の自治体より1億多いってことで保健師さんたちはすごく困っていたんですよ。国保税が上がるって。「じゃあ宇佐市で医療健康情報サービスとかコーナー作るのは意義があるな」とは思っていたのですが、そんなに簡単にできない。その前段階として、同期の保健師に「例えば糖尿病月間ってあるじゃない。そのときに図書館で糖尿病の展示するとかって、興味ある？」って聞いたんです。そうしたら次の日に係長連れてきて「やりたい」って言ってきたのでそれでやっています。今は単独の課ではなく保健師全体に広がって、月替わりで「高齢者のやつとかやりたい」とか「がん情報したい」とか「血液さらさら生活」だとか「おせちの食べ過ぎに注意しましょう」とかいうような展示をしています。

吉田：というと保健師さんとのつながりが今はかなり強固にできている。

島津：そうですね。栄養士さんも一緒に。ほぼ月替わりで展示をしてくれて。

吉田：月替わりってことはもう、日常的につながっているってことなんだね。

島津：そうですね。その後光交付金で医療健康情報コーナーを作って、静岡県立子ども病院の塚田さんに講座をしていただいたり、今ちょっと別の大学ですけど北海道医療大学の平さんに医中誌webの使い方講座とかをしていただいたりもしました。「困ったときには図書館へ」にも書いていますが、塚田さんの「源泉かけ流しブックリスト」プラスαで宇佐市民図書館の医療健康情報コーナーはできています。このブックリストがあれば、大き

な図書館じゃなくても割合気軽にできるかなと思います。

吉田：私、法情報サービスを始める前は医療情報サービスをやっていて、それはもともとカウンターでは医療や健康についての相談があって、何とかできないかと思っていたところに、健康福祉局から図書館で患者への情報提供のコーナーみたいなもの作ってくれませんかねって話があったから始められたところがありました。

島津：うちも医療費が高いというバックグラウンドがなければ、すぐにはできなかったかもしれません。日本医学図書館協会を知ったのは神代隊長が海援隊のメーリングリストで「JMLAってところに行ったんだよ」と書いて下さったからです。宇佐市民図書館ではカウンターに医療健康情報についての相談をされる方っていうのはあまりいないのですが、困ってる方は潜在的にたくさんいるはずなので、病名別に置いてその人たちが見て探せるようにしています。

吉田：それで、実は宇佐も横浜も医療健康情報サービスをやっているのに、私たちはリボン部に参加してないんだよね。

島津：そうなんですよね。

吉田：それがなぜかっていうことも今日は話さなくちゃいけないところだと思ってて。

島津：そうですね。これからを考える上では必要かなとは思っています。

吉田：何で参加してないの。

島津：いやだって知らないうちにできていたから。

吉田：そうなんです。知らないうちにできていたんですよ。

島津：私たち医療健康情報していたのになって。

吉田：そう。声も掛からなかったし。

島津：メーリングリストのほうに「リボン部ができたって話あったかな？」って探したんですけど「あれ？なかったなあ」と思って。

吉田：海援隊で私たちがやらなかったことって何があるんだろうって考えたら、医療情報だったんです。どうして参加しなかったのかというと、一つには海援隊は情報が内輪で閉じているっていうところがちょっと問題かなと。有志が参加していてその有志で盛り上が



ってどんどん先に行っちゃうんですよ。へ？って思っているうちに先に進まれちゃって、もうついていけなくなっちゃうんだよね。

島津：そうですね追っかけられなくなって。

吉田：ときどき振り返って、こっちおいでって手招きしてくれるだけでいいのに、それがないのがもったいないな。例えば文科省のホームページに載っている図書館に、こんなこと始めますよ、いかがですか？って、一声掛けてくれれば横浜も乗ったんじゃないかと。もったいなかったな…って、今からでもいいんですよ。

島津：そうですね可能でしたら。

吉田：実はもう一つ海援隊でちょっと、うーんと思っているところがあるんですけど。すいません、言祝ぐ場なのに。私が法情報サービスの担当外れたところで、人と人がつながっているっていう海援隊の強みが弱みになってしましまして、関係がちょっと切れてしまったところがあります。本の中でも書いてありますけど、海援隊って属人なのか組織なのかよくわからないって言われたことがあります。有志がつながるといのは海援隊のいい点だけれども、本体は図書館レベルでしか参加できないんですよ。海援隊のホームページって平成22年から更新が止まっちゃっているんですが、組織じゃないとあそこには名前を載せられないんです。それで、1回載せちゃうと今でもやっているように見えるけど本当に今でもやっているの？っていう館もあるんじゃないかと。有志でつながっているけど本体は組織でしか参加できないという海援隊の矛盾をどうしていくかを考えていくこと。それから一部の有志の間で情報が閉じている状況を何とかすること。この辺が海援隊活動にこれから必要な部分なのかな…と、あえて苦言を申しましたよ。

島津：そうですね。私たちもやっていることが結局同じこと、似ていることなのについていうところはあるので、ぜひ今後は、メーリングリストがせっかくあるのですから、もうちょっと活性化して情報共有ができるようになっていきたいなというふうには思います。

吉田：じゃあ、このくだりは以上でよろしいでしょうか。この後これからやりたいことは何かをお互いに聞き合ってみたいと思います。どっちからいこうか。私から？

島津：じゃあ私ですか。

吉田：うん。

島津：では、今やっていることからご紹介します。お手元に水色の資料とカタログがあるかと思います。文科省の委託事業で「Made In Usaを知って学ぼう、楽しもう！」という事業をしています。宇佐市はUSAと書きますので、「Made in USA」と

ちょっとかけています。2013年に国東半島宇佐地域が世界農業遺産に認定されました。「世界農業遺産」が何かご存じでしょうか？みなさんユネスコの世界遺産とよく間違われるんですが、これはFAO（国連食糧農業機関）が認定するものです。水色の資料を見ていただくと世界農業遺産とは何かが大体わかるような講演の抄録になっております。図書館員の方ぜひ読んでください。また、認定されるまでの期間が短かったので「世界農業遺産で宇佐と何の関係があるの？」って市民の方が多かったので、裏側にはそれを紹介しております。これも講演の抄録になります。

その「農業遺産と地域振興のこれから」という5ページの上の段のところに国連大学の武内先生が「日本人の認定地は他国に比べて人口減少が進んでいるので、高品質な農産物をブランド化して農業と食をつなげる取組で農業遺産を農業再生のために使ってほしい」ということになっております。ちょうど宇佐市が「宇佐ブランド認証品」というものを作っております。企画展ではこの「宇佐ブランド認証品」を一緒に紹介しました。例えばユズコショウです。宇佐市の院内町は西日本有数のユズの産地です。それから宇佐神宮のパッケージに入ったカチエビ。その認定品のカタログがこちらになっております。この産品もしくは写真を全部展示しまして、去年は現物が展示できたものについてはプレゼントということをさせていただきました。今年はその中の一つ、カタログの8ページにあります小松酒造場さんのお酒づくりにフォーカスを当てた企画をします。図書館としてはたぶんあんまりないであろう企画で、宇佐神宮の奥宮の御許山へ登山してきたところです。

小松酒造場さんを取り上げる意味は、酒作りを止めていた酒蔵を復活させたってだけで地域振興です。ですが、それだけではなく、もう作られなくなってきた大分県固有米の「大分三井」というお米を復活させて、さらにそれを酒作りに使っています。御許山の麓で、契約栽培して。まさに、宇佐市で作られた米で宇佐市の人が作る6次産品で、宇佐ブランド認証品なんです。学びとか付加価値を創るのがとてもお上手で、そういう学習の成果を地域振興に活かして下さっている。けれども地元の方にどう思われているのかわからなかったらしく、去年の企画展示で応援コメントを付けていただいたら「それがすごくうれしかった」っておっしゃるんです。ですので、「頑張っている方の気持ちを支える」ということが地域振興の場でも必要なのかな、と。今年はそのような事業をしております。

吉田：前は麦で焼酎だったよね。

島津：そうですね。

吉田：今は米で酒なんだね。

島津：私あんまりお酒飲まないんですけど。それはサッカーと同じですね。

吉田：うん。自分が好きじゃなくても地域のためになることなら。

島津：そうですね。それじゃないと属人的な仕事になってしまって。「あなたの趣味でやっ

ているんでしょ？」って言われてしまう。そうじゃなくてちゃんと理由があると説明できることが大切だと思います。酒作りが宇佐市の地域資源であり地域振興になるのですからそれを紹介していきます。

サッカーに関しても、日本代表には西川周作選手、松原健選手と宇佐出身選手が2人もいらっしやる。育てたのは大分トリニータである。応援しないでどうしますか？と。トリニータは今年20周年です。「日本代表を2人も育てて下さって感謝します」というのも伝えなきゃいけないことかなと思っています。ちゃんと市民や他の部局に説明できる取組を続けていかないと継続性がなくなると思います。これが海援隊に結構大切なことなんじゃないかなと思います。では吉田さんは？

吉田:実は私この間2年ぶりに名刺を作ったんです。何で名刺が作れなかったかという、ちょっと職場では落ち込んでいて。それで主に図書館の外部で活動していた。例えば、レファレンスサービスを取り上げた「夜明けの図書館」というマンガのお手伝いをしていました。それで編集者や漫画家さんとのやりとりをしながら、外の人に向かって図書館を説明するときには相手はどんなことを聞いてくるか、どう話したら相手に伝わるのか、ということはずっと考えていました。

巻を追うごとにどんどん話に深く入り込んでいって、第3巻では医療情報サービスをやりましょう、とJMLAの「やってみよう 図書館での医療健康情報サービス」をお貸ししてそれがコマに登場したり、図書館には自館で回答するだけでなく、人と人をつなげて情報を提供するレフェラルサービスというのもあるのでそれを載せましょうとか、そういう提案もできるような関係ができてきて。図書館の外で図書館を知らない人たちに図書館を紹介するって大事だし面白いなって思いました。

もう一つ、神奈川本大賞実行委員会という活動に参加していたんですが、そのときに図書館が参加するなら協力しないって言われたこともあって、図書館は出版業界や書店の人から白い目で見られていることを実感しまして。何でだろう？と出版社の人に聞いたら、図書館の人と話をしたことがあまりないし、得体が知れないんだよねって言われて、そのときに図書館って出版社や書店に対してどんなことしてきたんだろう。何かしてきたことあったかな？もっと図書館って外の世界に開かれなくちゃいけない、と強く思った。

だから例えば、これは海援隊で次は何やってみたいかって話なんですけど、レファレンス本大賞とかどうだろうかと。例えば図書館の強みの一つにレファレンスっていうのがあって、レファレンスブックっていうのはなかなか売れない本だし市民には知られていないけれど、この本はこんな風に使えます、この本を作ってくれてありがとう、と出版社に対してその生業を言祝ぐような賞を作れないか。それを図書館集団と外をつなげ、PRできる海援隊でやってみてもいいんじゃないかと。

何が海援隊の本流か、って考えるより、この海援隊という枠組みがどう使えるか、そこで私たちは何をしたいかって考えて好きにやっていけばいいんじゃないかなってちょっと思ってます。

島津:今後の海援隊に関しては、もっといろんな取組があってもいいんじゃないかな、と

思います。ちょっとだけ来年度たぶんやるであろうという取組が1つあります。実は市内に宇佐ランタンという企業さんがあります。経産省のダイバーシティー経営企業100選に2013年に選ばれ、第4回「日本で一番大切にしたい会社」の審査員特別賞を受賞した会社が人口6万の小さな宇佐市にあります。そこは何が突出しているかと言いますと、14人の正社員がいらっしゃるのですがそのうちの8人が知的障がい者で、うち4人が重度の方。最低賃金の規制とかもう取っ払って、生活できる賃金を支払っていらっしゃること。それで9月に企業研究をしました。

実はこれに関してはビジネス支援図書館推進協議会との共催で「図書館員のための優良企業研修」というのをしました。竹内会長が来て下さって、企業をどういうふうに見ればいいのかというようなことを紹介して下さいました。

見学したときに驚いたのは作業をしているところを見ると、知的障がいがあるってことが全くわからないことです。手の動きも速いし、どんどん作業を進めて、楽しげに働いていらっしゃる。実はその後で別の企業も見に行きました。普通の一般企業でみなさん健常者の方が働いていらっしゃるんですが、その企業よりもとても表情が明るいのです。障がい者の方の出勤率は98パーセントという高さを誇り、納期にも多大な貢献をしてらっしゃる。そういう地元の企業がある。

一方宇佐市には珍しい盆行事が残っているんです。新盆の家庭に行ってお参りをそれぞれの家庭です。「傘鉾」って聞いたことある方いらっしゃいますか？ないですか。傘鉾を立ててそこで盆踊りを10種類近く踊るといふ風習が残っている地域があります。それには提灯が欠かせないんです。地元の文化財的なものと地元の企業を連携させた紹介とか。そんなことができないかな、と思っています。

吉田：なるほど。海援隊でダイバーシティーを広めると。例えばどんな風に？

島津：例えば、ダイバーシティーを広めるのではなくて、こういう企業がいらっしゃるってことだったり、どういう工夫をしたら身体障がい者とか知的障がい者の方の能力を引き出していけるか。ダイバーシティー経営っていうのは何かって言うと、多様な人材を生かしてその能力が最大限発揮できる機会を提供することで、イノベーションを生み出し価値創造につなげている。そういう経営のことを言うそうなので、今後例えば発達障がいの方や長時間働けない方が多いという社会になってきた場合には、とても大切な考え方じゃないかなっていうふうにも思っています。

吉田：なるほど。ギャンブリング講座でも、実は発達障がいも問題の一つとしてあるって聞いたんだ。いろんな問題がいろんなところにあるよね。つまり、これが海援隊って決めないで、せっかく海援隊というつながり合うことができる場、すてきな仕組みができたんだから、私たちはそれを守って、もっと大きくして有用に使って育てていけばいいじゃないかと、そんな風に思います。

島津：そうですね。

吉田：苦言もたくさん申し上げましたが基本的にわれわれは応援していると。そう思って安心していただければ結構でございます。

島津：最後に吉田さんを前にしているのは何ですが、ビジネス支援や医療健康情報とか、新しい動きに対しては、鳥取県立や横浜市立がやはり目立った活動をしていると思うのですが、事例発表の後に「鳥取だからできるのよ」「横浜だからねえ」という感想を私は聞きます。

大きな図書館だからできる、という考えのままでは、市町村立では永遠にできない。大きな図書館がやったことを参考に、自分の自治体では何が求められているのか取捨選択し、どうやったらできるのかということを考える必要があります。ですから、海援隊の今後を考えると本当は、私や吉田さんが図書館の「女傑」とか「危険物」と言われて、こんなところに登壇するようではいけないのでしょう。私は小さい図書館で、なるべくお金をかけずにできることを、と考えてやっています。特別なことではなく、いたって「普通」にやっているだけです。図書館海援隊の活動が「普通」「どこでもできること」として認識されることが必要だとおもいます。

吉田：というわけでみなさんお耳汚しでございましたが、われわれ2人の話はこれで終わりとなります。ご清聴ありがとうございました。

島津：ありがとうございました。